本当の、本当の大事なコト

樋口 ミユ

もっとも大切なことを書く。書かねばならないから書く。忘れてはならないから書く。ただ好きだから書く。ひたすら悲しいから書く。怒りでオカシクならないために書く。人を殺さないために書く。たくさんの笑い声を聞きたくて書く。人々の涙を止めたくて書く。未来を変えようとして書く。過去を癒そうとして書く。今を明らかに見るために書く。誰かのために書く。自分のために書く。きっとそれぞれ。だからなにを書いたってイイと、心の底から思う。それぞれが、大事にしたいことが文字となってあらわれる。その「大事なコト」だからこそ、こだわり、突き詰め磨いて欲しいと思う。

三枝さんの『かもめごっこ』20 代でも 30 代でもどの年代でも、どうして演劇やっているんだろうと、ふと誰もが考える。どこかで見限り、どこまでも未練を引きずる。自分の思いや夢や信念を貫けるほど、生活や社会は温かくなく、ちっぽけな自分を騙し騙し生きている。それでもなぜ演劇を続けてしまうのか？　分かりやすい成功と挫折だけじゃない、それらを超える向こう側。なぜ続けているのか。続けてしまうのか。抜け出せない劇団の人間関係だけじゃなく、肩書きや自尊心や自己肯定による満足、不満足だけじゃなく、なぜ自分が演劇を手放さないのか。本当の本当の大事なこと。そこにこだわって描ける真摯な思いや体験が、三枝さんにはきっとある。ごっこをしない『かもめ』を描けると思う。

『透明な山羊』田辺さんの作品は、死と生と意識。どれもつかめない。物体として分かりやすく目の前に置けない。死者の「声」にフォーカスしたことは、とても面白いと思う。つかめそうでつかめない。肉声なのに、もう肉体はない。矛盾に縛られる。テープから聞こえる「声」の意思は過去のもの、けれど今現在、聞こえているという矛盾。これまたつかめない。「声」という仕掛け。思いついたアイデア。ここに、とことんこだわってみる。本当の本当は、なにを描きたかったのか。こだわることで見えてくるものがあると、自分が出したアイデアをきっともっと大事にできるはずだと思う。

『われわれは遠くから来た、そしてまた遠くへ行くのだ』キタモトさんの泉鏡花。大いなるミステリ。なぜわれわれは罪を犯すのか。この女たちはなんなのか。そしてなぜわれわれは懺悔をしてしまうのか。自分たちはどこにいるのか、そもそも、自分たちとはなんなのか。この問いに踏み込んだことが幻想の入り口だ。生きていることそのものが幻想であると感じられる。結論は潔く明確だ。「なんでこんな人生なんや」と悪態つくとわかっていても、我々は生まれることを選ぶだろう。それは「コロナになると分かっていても演劇やるに決まってるやろ」と、同じことなのだと思った。決定的な思いがあるからこそ、幻想の入り口そのものが少し長く感じられたのがもったいないと思った。もっと中に入り、右も左も上も下もない生まれる前の空間で、たくさん大いに迷い、迷子になりたかった。

台詞の面白さは、戯曲の面白さのうちのひとつである。そこで近藤さんの『バス・ストップ』なのだ。「大将、どて煮」たったこれだけの台詞がなんともおかしい。へにゃへにゃと気の抜けた笑いを呼んでくる。そして笑えるのになんともイタイ台詞もあったりして、台詞が人物造形の広がりを見せていく。けれど気になるのは「構造」なのだ。どんなふうに始まって、幻想の入り口をくぐり、走馬灯バスが走り出し、幻想の出口を通り抜け、現実に戻ってくるのか。「おーい」と血の声によって導かれるはじまり。ありえないけれど、ありえるかもしれない血の声。血とはなにか。つながりはどこからくるのか。そのこだわりが、「構造」を作っていくことになるはずだ。正直にいえば確かに、ずいぶん改稿の必要がある。だけどだけど、この台詞のセンスはとっても素敵だ。ちょっと真似しようがない個性。ピカイチに輝いている。

反対に「構造」にとことんこだわるのが土橋さんである。『その間にあるもの』の構造は見事だ。読み終わったあとに物語に飲み込まれたという爽快な後味が残る。なぜこれを書かねばならないか、書こうとしたか。根底には「演劇」へのこだわりだ。演劇とは体験、という定義をもとに、この戯曲は構築されている。圧倒的なクオリティ。だからこそ、台詞にもこだわって欲しいと願う。自ら設定した構造さえも吹っ飛ばしていく言葉、言葉、言葉。台詞にこそ、心動かされ

ていく快感があるのだ。台詞を磨くのだ。それを獲得できれば本当に未知の世界をその言葉で作ることができるのだと思う。

『いきているみ』私道さんの言葉には個性も思いも美学も、そして真実もきちんと在る。うっかりすると忘れてしまうこの肉体、末端と思考のみが肥大する現代だからこそ、この試みは必須で大事なことなのだろう。だけどわたしはなにかが引っかかるのだ。肉体そのものを知ることから始まる。これは始まりのテキストなのだと思う。あなたの物語と、わたしの物語を隔てるものとして、この世に肉体が存在するところに立って、やっと言葉は肉体性を持つのだと思う。このテキストを土台に、なにを書くのか。わたしはそれを読みたいと願う。それならばきっと、想像を遥かに超える戯曲になると思うからだ。

山脇さんの作品『わたしのこえがきこえますか』このタイトルに「聞こえます」と、演劇は胸を張って答えられるようにならねばならないのだろうと思う。読めばきっと多くの人が心を動かされるだろう。和美が自ら考え、選び、できることを手話で語るシーン。このシーンがあるからこそ、父親が世間の呪縛（それは自らにかける呪縛であるのだが）をどう乗り越えるのかが重要なのだと思った。相模原障害者施設殺傷事件とその死刑確定が背景にあることで、よりそう思うのだ。もしかしたらわたしは読みながらハードルを上げているのかもしれない、とも思った。けれど、この作品は、とてもとても大きく社会へ問いかけている。だからこそ、こだわりたい。聞こえているわたしたちには、思い込みや偏見、そして差別が確かに在るのだ。さりげなく、けれどするどく切り込んでいるからこそ、そこで一番身動きがとれない父親をどう描くのか。この一点を、もがいてあがいて言葉を紡ぎ出すことで、言葉は磨かれていくのではないかと思う。

いつも思う。わたしはなにか読み落としてはいなかっただろうか。作家が意図したことは、伝わる。それらでなく、意識しなかった、意図しなかったが、根底にあるナニか、その作家が持つ力、無意識に言葉に乗っかりあらわれるのが、作家の核心だと思う。作品を読むことは、自らは気づかない作家の眠る可能性を見つけだす作業だ。それを見つけられただろうか。